校長室だより～燦燦～ №６８

天の川銀河

2020.2.26

先日、本校１年生の理科の授業を参観した。単元名は「身近な天体と太陽系における地球」となっており、授業のねらいは「太陽系の広がりや惑星について縮小したモデルを用いて理解する」ことであった。

授業会場である化学実験室に入った。すぐに感じた。雰囲気がいいのである。小学校、中学校、高等学校といろいろな教室に行ってみると、すぐにその教室の空気感、雰囲気というものがわかる。雰囲気がよければだいたい授業はうまくいく。逆に停滞した空気が流れていると、授業もそうなる。

授業が始まった。前の時間の復習をするために、授業者が生徒に質問をする。男子生徒を中心に反応がいい。中には、根拠が不明確な発言をする生徒もいる。しかし、このような生徒が授業の雰囲気作りに貢献しているのも事実なのである。授業者と生徒との関係がいい。途中で気がついたことだが教室に安心感があるので生徒が発表しやすいのである。

男女混合の３人グループで活動していたが、どのグループも一人一人が活動している。これがなかなかむずかしい。グループになったはいいが、活動に参加しない、参加できないでいる生徒を見かけることがある。今回の授業ではワークシートを使っていたが、ワークシートをもとに、一人一人が自分で考え、その後グループとしての考えをまとめていった。そして、ホワイトボートに記入しグループごとに発表していった。よかったのは、生徒がグループで活動している最中に授業者がしゃべりすぎないことだった。途中で必要な指示等は出した。後はずっと生徒に任せていた。

学習形態としてグループにはなっているが、一人一人の学習量が保障されていた。学習は個に成立するのである。学習というのは、集団として見るのではなく、一人一人にとってどうなのかと見なければならない。

改善点はもちろんある。例えばホワイトボードを使った生徒の発表である。発表は相手に伝わらなければ意味がない。相手意識が足りないことが多い。指導すればもっともっとよくなる。普段の授業で鍛えておくことが必要である。こういったことは授業を中心とした普段の積み重ねが重要である。これが総合の時間にも生きてくる。各科目の授業と総合の時間との往還が理想である。

授業の後半では、距離を計算する学習となった。それまでとは違って生徒は「むずかしい」などと言いながら悪戦苦闘していた。それでも全員が答えを求めようとしていた。これでいい。それまでの前半の内容が生きていた。

授業の最後の方では「地球の衛星である月。その裏側には宇宙人の基地があると噂されたことがある。地球から月の裏側が見えないのはなぜか。モデルを用いて検証してみよう」に取り組む予定であったが時間がなくなってしまった。まとめでは、生徒が感想や気づいたこと、疑問をワークシートにまとめていた。その際、授業者は「疑問に思ったことが大事」「自分が思っていた太陽系と違っていなかったか」などと生徒に話していた。決してしゃべりすぎずポイントは押さえている。

５０分の間、ずっと生徒の表情は生き生きとしていた。手を動かし、考え、書く。グループで話し合い、考え、また書く。計算では本気で頭を使う。授業の質的なレベルは工夫次第でもっと上げることができると思うが、今回の理科の授業のような授業が各教科、各科目で展開されると生徒にとっては幸せなことである。そして、授業者にとっても手応えを感じる授業となる。